

中国の家計の資産・債務の変化に関する一考察

唐 成

目 次

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 重要な政策課題としての家計金融問題 | 3. 家計の債務行動について |
| 2. 家計の金融資産選択について | 4. 家計金融の新たな変化と課題 |

近年、中国の家計の資産と債務の状況は大きく変化しており、中国の経済・金融に大きな影響を与えている。中国の家計は膨大な金融資産を保有しており、その資産選択は多様化し、特に理財商品の保有が拡大し、シャドーバンキングの重要な資金源となっている。また、不動産は中国の家計にとって、主な資産形成手段であり、住宅ローンを中心とした家計債務の規模の急拡大と密接に関係している。さらに、デジタル金融の発展も、中国における家計の資産選択行動と債務行動に新たな影響を与えている。

1. 重要な政策課題としての家計金融問題

高まる家計の資産・債務への懸念

家計の資産選択理論研究の進展とマイクロデータの普及を背景として、家計金融に関する研究は1980年以降急速な発展を遂げており、金融研究の重要な領域として認識されるようになってきた(Campbell [2006])。家計の資産形成は経済的な安定と将来への備えにおいて重要な役割を果たす。1978年以降における中国経済の高い成長率

とともに、家計部門の金融資産の規模が急速に拡大してきた。この膨大な金融資産を背景に、家計の資産選択行動が中国の経済・金融に多大な影響を及ぼしている。例えば、2010年代、国内外から懸念されたシャドーバンキングの膨張をもたらしたのは、シャドーバンキングが家計部門の膨大な資金の受け皿となっていたからである。言い換えるならば、家計部門は資産選択を多様化させ、理財商品の保有を拡大させた結果、家計部門の金融資産がシャドーバンキングの重要な資金源となっている。つまり、多様化しつつある家計の金融



唐 成 (とう せい)

中央大学経済学部教授。中国浙江省紹興出身。2001年筑波大学社会科学部研究科経済学専攻修了。博士(経済学)。慶應義塾大学総合政策学部訪問講師、桃山学院大学准教授、教授などを経て、2014年より現職。近著に、『家計・企業の金融行動から見た中国経済—「高貯蓄率」と「過剰債務」のメカニズムの解明—』(有斐閣、2021年)。共編に、『*Growth Mechanisms and Sustainable Development of the Chinese Economy: Comparison with Japanese Experiences*』(Palgrave Macmillan、2022年)がある。